長久保赤水の日本地図編集のあらまし

長久保　光明

はじめに

長久保赤水（1717～1801）は江戸中期の人で，水戸藩の5代宗翰から6代治保にあたり，幕府の8代将軍吉宗から11代家斉にあたる。

常陸国多珂郡赤浜村字町の長久保氏5代貞永の庄屋屋敷（彼の祖父で農業）で誕生し成長した。のち祖父母を失い，8歳のとき両親・弟（2歳）・農夫らと約1，2キロ北の字北原に移る（江戸時代の用語は新屋）。農民の子として生活し，弟は3歳，母は29歳，父は34歳と8年間に5人の近親を失い，11歳の赤水は全くの孤児となり，継母[1]の養育ですなおに成長した。

(1)青少年時代の勉学。少年赤水の脳裏には百姓の農民で身を立てるよりは，学問により大成しようとする心構えがあったのであろう。隣村の下手綱村（水戸藩附家老中山氏の松岡城があり，松岡郡郡奉行が近村支配）の医者兼漢学者鈴木玄淳の家塾に学び，青年から壮年に至るまで漢学・漢詩などの指導を受けた。赤水は新屋（のち赤水旧宅）から農閑期や雨の日に，約4キロ離れた鈴木塾に通った。

のち玄淳を中心とする松岡七友（常北七友）が結ばれ（医者3・修験2・農民2），玄淳の塾に集り漢詩の会や漢籍など学習した。のち赤水も陸奥国岩城の某寺に招かれ論語古訓を講釈して，彼の名は隣国（今の福島県）にまで知られるようになった。

(2)常北七友（赤水文草による）。今の北茨城・高萩・日立市の県北東部に住む彼等7人は，漢学について切さたく磨したことが今も語り伝えられている。この七友（赤水37歳）作の漢詩は，水戸藩5代藩主徳川宗翰（良公）の高覧となり，宝暦3年（1753）5月8日，七友は水戸城御殿（今の水戸市三の丸2丁目・県立水戸三高）に召されて賜金を受けた。この七友同士の励みが赤水をして，漢学者への道を開いた，と批評してもよい。赤水の漢学（読みと解釈と漢訳）と漢詩の実力は，彼の著書・写本・赤水文草・赤水文集などを読むとわかる。

(3)日本地図の完成。彼は青・壮年の在郷時代に農業に精励し，田畑の農作業に馬をつれて行き，一休みに持参の漢書を読んでいた。また夕食後には線香の明かりで読書したり，晴耕雨読・寝前読書など，余暇の善用を十二分に発揮した。こうして農耕と漢学の勉強のほかに，日本地図編集も思い立ち，45歳頃（宝暦11年＝1761）から資料と諸書と元禄時代（1688～1703）発行の日本地図などを，七友のひとり柴田平蔵（今の北茨城市華川町字木皿）から借用・贈与により草稿を始めた。

この間に，陸奥国勿来関―岩城平―相馬中村―岩沼―仙台―多賀城跡―松島―石巻―鳴子―出羽国新庄―出羽三山に登る―酒田―南下して越後国新潟―東へ戻り陸奥国会津―郡山―奥州街道を南下―白河関―下野国太田原―常陸国大子―多珂郡黒前村―新屋の自宅・赤浜村に帰った。同行は七友のひとり柴田平蔵の子息2人とその他の者を加えて数人で出かけた。44歳の赤水は，道中で磁針器を用いて方向を調べて記したり，半紙を横長に折半して，矢立てから毛筆を出して記した（宿場・城下町・名所旧跡など）。道順の一部は，松尾芭蕉の『奥の細道』の足跡と同じ所もあり，赤水は本書を読み下調べをしたことがわかり，興味深く感じられる。赤水は水戸藩

出仕後の寛政4年（1792）に『東奥紀行』を発行（漢文体で，いとこの子長久保中行が校訂）。当時の漢学者や知識人に読まれた。赤水76歳で発行が遅れたのは，水戸藩主に漢文講読の傍らの「余暇」利用のため。また上欄の余白には，その土地と関係ある和歌（奈良・平安時代）や漢詩や解説の漢文もあり，奥羽地方の名所・旧跡探訪の参考になる。中行は赤水のあっせんにより江戸の彰考館（水戸藩邸内の大日本史編修の図書館）勤務となり，余暇をみて校訂増補をしたのである。赤水の他の著作も，中行が校注をしていることを見逃すことができない影の助力者である。

こうして日本地図編集は，安永3年（1774）赤水58歳の時に完成した。日本史年表などに，安永3年刊とあるのは誤りである。同年の2月に西上し，京都・大坂の知名の諸士を訪ねた（長久保中行と水戸藩医となる原南陽も同行）。京都に滞在し家塾を開いていた柴野栗山（1736～1807，讃岐高松の人で始め阿波藩の儒者，京都に移り宋学を主唱し，後に幕府儒官となり昌平坂学問所教授。寛政の三博士のひとり）の序文（新刻日本輿地路程全図序）が，翌4年3月に成った。そして4年後の同8年（1779）に大坂で発行された。

Ⅰ　在郷時代の漢学の素質について

前述の常北七友は鈴木玄淳（号は松江，赤水より数え15歳上），福地東園（医者，漢学者，21歳上），柴田平蔵（号東江，3歳上），朝日祐誠（号旭峰，修験者で漢学に長ずる，5歳上），大塚祐謙（修験者，16歳上），大塚玄説（赤水と同歳，赤水の三男養子となる，医者）と農民の赤水（名は玄珠，字は子玉，通称は源五兵衛，号の赤水と名の玄珠と書の関防印「象罔得之」は『荘子』の天地篇から引用）らである。これら七友は前述のとおりだが，お互いに漢学や漢詩について論談し合い知識を深めた。従って単なる学問の独学ではない。独学では不十分であり，七友が皆，師であり，中心の師が鈴木玄淳であった。

赤水は25歳で水戸藩の漢学者名越南溪（なごやなんけい）（のち彰考館総裁）について，詩文や和漢の学の指導を受けた。これは七友のひとり鈴木玄淳の紹介による。玄淳の師も南溪であった。

更に水戸彰考館員の立原蘭溪（らんけい）（漢学者の立原翠軒＝のち総裁の父）の詩会に，水戸まで出向いて指導を受けたり，漢詩を交換したりした。蘭溪が57歳で没した時に赤水は54歳で，交友は30年も続いた。蘭溪[2]は館員であるから，赤水の好む漢書や地図などに便宜を図ってくれた，と推定できる。地図なども彰考館に刊本・写本ともに収納されていた（彰考館蔵書目録による。昭和20年3月の米軍空襲で焼失）。

七友との交友は，お互いに老人になってからも続き文通をしていた。赤水が水戸藩出仕後の68歳の時に，鈴木玄淳は下手綱村（今の高萩市大字下手綱，玄淳は子なく門人の渡辺文蔵がその跡を守り，今は渡辺文磨宅）の自宅で82歳で没す。赤水は「追悼松江盧（ろ）翁」や「故松江先生鱸君墓碣（けつ）銘[3]」や「和漢歴代歌序[4]」を書いている。

また七友の柴田平蔵[5]，朝日祐誠[6]，大塚玄説[7]の墓碑銘も書いている。

このように七友のうち4人の墓碑銘の漢文を見ても，赤水の学友に対する愛情と漢学の素質十分であることがわかる。

Ⅱ　在郷時代の著作について

(1)日本地図は安永3年に完成したことは前述のとおりで，発行は同8年（1779）春である。その詳細は後述する。

(2)赤水は中国流天文書も読解しており，日本地図の木版刻みに大坂に上ったときに，旅籠（はたご）で『天象管窺鈔[8]』を書き発行した（1774）。

(3)『東奥紀行』は前述のとおりである。

(4)赤水51歳の明和4年（1767）9月28日，磯原村（今の北茨城市）庄屋代理で長崎行の役を命ぜられ，漂流船員引取による水戸藩役人と同行する。赤水は

江戸まで4泊5日かかり，小石川藩邸から出発し10月12日長崎着。約7日間滞在し清国商館と和蘭商館の珍しい食事・風習などを興味深く記録し，いとこの子・長久保中行も同行して整理した。発行は赤水没後（1801）の文化2年（1805）で大分遅れた。これは水戸藩主に出仕し漢籍講読の傍ら，余暇を見ての浄書であったから。書名は『長崎行役日記』で，赤水の地誌的記載（特に道中観察のするどさ）がすぐれていることがわかる。本書は和文体。

(5)同じく長崎の清館で清国人と漢詩交換をした。その時に中行が整理して『清槎唱和集』を明和5年（1768）に発行。清槎とは，清らかの意で，音声を出して互いに唱和したもの。本書は漢文体。

(6)『安南国漂流物語』も明和5年以後に，和文体の写本として読まれた。近村磯原村の姫宮丸が海上に遭難（明和2年＝1765）し，太平洋を漂流して安南国（ベトナム南部）に至った。これは北東貿易風の影響によると思われる。本書は長崎の帰りに下関港に8日間滞留しているときに，漂流民から安南国の生活や風習や安南語を聞いて要約したものである。同行の長久保中行も代筆したりして，帰村後に清書している。いわば『長崎行役日記』の前文ともいうべきものである。

この(4)，(5)，(6)は赤水の長崎行の三部作ともいうもので，赤水の地理（当時は地誌の用語が多い）や民俗に対する新しい感覚が躍動している。この三部作や，(2)，(3)を含めて，赤水は地理学者としての見識が，在郷時代に蓄積されていたことがわかる。従って赤水は，漢学者兼地理学者と評価できる学者である，と筆者は常々，人に語っている次第である。単に日本・中国・世界地図を編集し発行したから，地理学者でなく，漢学を基盤にした中国流の地図作製と紀行文の地誌的記載とに，優れた才能を発揮している。このように学者として名声を博したのは，常北七友（松岡七友）の励まし合い，漢学や和学を助言指導した水戸藩の学者，赤水自身の余暇の善用と余技の才能などに因るものと思われる。

(7)赤水57歳の安永2年（1773）に，『芻蕘談』を著作し，刊本でなく写本として多くの農民などに読まれた。芻蕘とは草かりと木こりの意味で，農民などの貧しい話・博奕による失業・産児を殺し家族人数を制限する間引き・二，三男の生活・捨子・刑罰・仏法と水戸義公様・借金の事・子育てなど，戒めや生きがいなどの話である。本書は和文体。

(8)『常北遺聞』（完成年は不明，漢文体の写本）は，常陸国多珂（今は多賀）郡内の地理・歴史・民俗的伝承などを，赤水が昔の資料や聞き取りをして要約したもので，今の民俗学的な感覚がある。

(9)『儒仏辨』（完成年は不明，写本として流布する）は，儒教（孔子を祖とし，四書五経を中心とした儒学の教え）と仏教（仏陀の教え）との分別を論じた進歩的な意見が多く書かれている。特に水戸藩2代藩主徳川光圀の藩内の寺院・仏堂などの整理は，シャカの仏法の悪い一面を除くためと，光圀の五言排律（12句の漢詩）を基本にして注釈し要約している。これは漢学者でないと論評できないと思うほどの，うんちくを傾けていることが窺知される。

Ⅲ　水戸藩出仕とその後の20年間の著作

赤水は8歳から61歳まで北原の新屋で農耕に従事していた。継母の勧めもあり，同族長久保忠次の娘（21歳，赤水とまたいとこ）を嫁に迎えてからは，赤水（23歳）は農作業の傍ら漢学の勉強にも余裕ができた。そして日本地図編集や各著作にも打ち込むことができるようになった。継母や嫁や農夫などは専ら農業で，赤水の研究を援助してくれた。

安永6年11月10日（1777），郡奉行皆川教純や水戸藩の学者などの推薦を受け，赤水は61歳のときに，6代藩主徳川治保（文公）の侍講侍読（講読官）となり，七人扶持となった。また傍ら治保の弟・松平頼救（宍戸藩主で江戸駒込邸居住）の侍講も務めた。

水戸藩邸は江戸小石川にある上屋敷（今の文京区後楽1丁目，小石川後楽園その他の施設あり）で，藩士・侍講（他藩の儒者に相当）・諸役人などは

「お長屋」（水戸藩の呼称）に常住した。この「お長屋」は，江戸古地図には「百軒長屋」と記されている。

水戸藩邸は，水戸城御殿であり御三家のひとつである。常陸国水戸は，江戸の御殿を縮少した「水戸城御殿」（今の県立水戸三高と茨城大学附属小学校と水戸市立二中の敷地）は，家老が支配し，藩主は数年後か行事の時に水戸に「就国（しゅうこく）」する習わしであった。

水戸城御殿（今の水戸市三の丸２丁目，水戸駅から徒歩７分，県立水戸三高の敷地が中心，この跡は旧茨城師範学校とその附属小学校が前身）は，北東に那珂川が流れ，台地上の自然的防衛の地形に位置していた。

彰考館（大日本史編修の資料館）は，明暦３年(1657)江戸駒込別邸に史局を開き，寛文12年(1672)に小石川本邸に移し，左伝の「彰往考来」の句から命名。元禄11年（1698）から江戸と水戸で修史をし，文政12年（1829）に全部を水戸に移した。明治12年（1879）偕楽園内に移し，戦災で多くの蔵書を焼失し，今は水戸市見川１丁目の水戸徳川家の屋敷内にある（水戸駅から茨交桜川西団地行バス，見川２丁目下車。月曜と祝日の翌日は休館）。

(1)赤水は水戸藩出仕の翌年（安永７年＝1778）に，『農民疾苦[9]』を作り藩主治保に上申した。草稿はおそらく，在郷時代の新屋（赤水の時から呼称）における農耕生活の傍ら，書き上げたと考えられる。それは，文中の内容からも察せられる。内容は藩の農政のうち年貢米再改めと，大豆や雑穀の強制買上げを改革して農民を救済するなどである。

(2)『古史通大意』は，赤水75歳頃（寛政３年＝1791）の作で，写本である。内容は，日本上古の古事記や日本書紀や古語拾遺などは，神代の神々の昔話や伝説を述べているが，赤水はそれらを論評し，考証している。つまり嘘も真もあり取捨する必要がある。そして本書は新井白石の『古史通』を参考にしている。

(3)『為学（いがく）入門抄一曰正道抄』は，門人高橋広備（文政６年＝1823に水戸藩を致仕し同年５月21日53歳で没）が要約したもの。赤水が門人に漢籍や和漢の学を教授し，四書五経の熟読・日本の歴史を知ることを述べている。赤水の学問への愛着が理解される。

(4)赤水は藩主に漢籍を進講する役目が終わると，藩邸内の彰考館蔵書（刊本・写本の和漢の書籍や地図など）を閲覧しては，和紙に要点を記入する毎日であった。余暇の善用では他の学者（侍講など）に見られないことも，高く評価してよい。

歴史地図帳では，中国古代から清代まで13図からなる『唐土歴代州郡沿革地図』（有彩色）を発行している（寛政元年＝1789が初版で，没後の天保６年＝1835と安政４年＝1857の２回発行）。これは中国の歴史を勉強する者に役立ち，各藩も教育用の教材にした。

(5)『経天（けいてん）合地大清広輿図（だいしんこうよず）』は天明５年（1785）以後に発行（年月の記入ない）された大判（189×186cm）の清帝国（1661～1912年）の歴史地図である。天明５年に久保亨（とおる）と中国人の程赤城（長崎在住）の序文がある。中国の『大明一統志』を参考に編集し，緯度は21度～44度，経度は75度～98度まで引画され，山・川・府城・州城・地名などが記されている。本図は江戸中期～後期にわたり，各藩の教育用に利用された。

(6)世界地図も編集し，題箋（表紙）は『改正地球萬国全図』で，内題は，地球萬国山海輿地全図説といい，世界地理の内容が上部に記されている。天明５年以後に発行（年月はない）され，大判や小判など数回発行され，庶民の世界認識に役立つことが多かった。

本図は原目貞清の『輿地図』（享保５年＝1720発行）を赤水が利用し朱書している。また『職方外記』も参考にして地名考証をしたり，マテオ・リッチの『坤輿（こんよ）萬国全図』の世界の形状を参考にしている。この赤水の世界地図も江戸時代の庶民の間に流布し

た。

(7)『礼記王制地理図説』は，赤水76歳の寛政4年（1792）発行で，再版は没後の天保10年（1839）。内容は，中国の夏・殷・周3代の税法や，わが国の租税・尺度・暦・石高・地理などの図説や，十二支の異名・星座・暦の早見などの初級暦学なども記してある。

(8)『海防意見尺牘』は6代藩主治保に上申した手紙（和文体）である。赤水77歳の時に，東海兵談の大意として藩主に上申したもので，兵法・藩主の政務・海辺武備の無益・外敵大軍は水戸城や金砂城に籠城し江戸大将軍の出馬による合戦・赤水自身の作戦と戦略などが，興味深く語られている。藩主も満足して読まれたと思われる。

(9)『大日本史』の地理志草稿は赤水自筆の漢文体が10数冊残っている。天明6年（1786）に赤水（70歳）は，地理志編修に従事し「彰考館編修」の職名で，致仕（退官）する81歳まで10年余りを侍講の傍ら，日本68か国の各郡村の由来・名所旧跡などの地誌を諸資料を閲覧して要約した。ミツマタの半紙1枚に1行20～24字で15行の300～380字ほどが記入されている。赤水は知人[10]や郷里[11]の新屋とも音信を断ち，「お長屋」に独居し（妻は帰郷させる）編修に専念した。郷里の勧めで，やっと赤浜村の新屋（前新屋と後新屋に分かれる）に82歳で帰った。

史料の主なる本は，旧事本紀・続日本紀・常陸風土記ほか，記紀・和名鈔・68か国の各国志と各国図（国絵図）・赤水自著の諸書や地図・各家文書・日本全図・各物語など膨大なものであった。これらを漢文体に漢訳できるのであるから，まさに漢学者としての腕のみせどころであった。

十数冊に及ぶ草稿は，詳し過ぎて『大日本史』には不採用となった。明治時代にはいり栗田寛（彰考館編修のち東京大学教授）の新たな編修で，「国郡志」の名称で，大日本史に集録された。しかし赤水の地理志稿は地誌の記載としては優れており，高く評価してよいものである。赤水は採用されるものと信じて，85歳（享和元年＝1801　7月23日没，同月25日土葬，墓は高萩市指定文化財の史跡）の生涯を閉じた。

Ⅳ　日本地図編集について（在郷時代）

赤水が漢学者であることは前述のとおりであるが，中国の書籍だけでなく，日本人が書いた漢文や和書にも目を通し幅広く学んだ。そのせいか当時の人は誰言うとなく，赤水を「博覧強記」の人物と評するようになった。水戸藩にはそれぞれの専門の漢学者がいたが，赤水は地理・天文などの本にも興味を持っていた。著書の『東奥紀行』にも，「予は山水の癖あり」「予地理を好む」などと記されている。

(1)間接的資料。中国の天文書の和訳本『初学天文指南』（馬場信武編，全5巻，1706年刊）を熟読し，今も残っている。内容は渾天儀並に制作寸法，闕管論並に制作寸法，山海輿地論同全図，中華15省測験，北極星地（北緯），南北の経線360度などである。

『運気暦術天文図解』（井口常範編，全5冊，1689年刊）を読み，上部余白に朱書や墨書するなどていねいに調査している。内容は，古今天体図・天周の度並日月行度・月光・日行・二十八宿・日月交蝕・古今暦法などである。

『風土記』（当時現存する各国々），『武鑑』（元禄や享保年間に発行された日本全国の各大名の石高・江戸から各藩の城下町や村々への距離—何里何町），『倭節用悉皆袋』（江戸から各村への距離・海路その他百科便覧など），当時の文化人の『紀行文』なども参考にして，地名や名所旧跡や仏寺や城下町や山川湖沼などを調べた。

(2)元禄年間に発行された日本全図。そのうちの『本朝図鑑綱目』（図工・石川流宣作，彼は菱川師宣の浮世絵師門人，1687年刊）と，『日本海山潮陸図』（同人作，1705年発行）とを，赤水は見ているが満足しなかった。それは両図とも有彩色で美しいが，日本の形状（海岸線など）は不自然で，緯度の緯線記入もない粗放的なもの，と赤水は解釈してい

る。もっと具体的な真実の海岸線の形状を画こう，と赤水は考えていたことが諸資料や地図などによって窺い知る事ができる。

(3)直接的資料の収集と利用

a）地名考証の例。「出羽村山郡印役村，山形の北東5丁ばかり，あこやの松は在平清水村，天童城は山形より3里北，尾花沢10里余りあり，山の辺2里半西，上の山正南4里，畑屋5里南西，大沼へ8里西」などのように，距離・方角（方向）を記入し，その地名の位置を確認するなど用意周到さがみられる。

b）「松前の御城下よりエサシ西北に18里，大嶋へ20里，エサシより津軽三馬屋より12，3里，三流の潮風あり，東風を順とす，風やわらかいと潮に流され南部沖へ漂す，西の方18里を江指と云う，東の方27里亀田1里，箱館湊，東廻回船，此にて天気を伺う」など，和紙に毛筆で記していることからも，地理的記載（又は地誌的導入）に長じていたことがわかる。まさに博覧強記の漢学者兼地理学者ということが可能である。

また，「夏は潮起と云うことあり，巳（み）より未刻（ひつじのこく）まで，蝦夷周囲800里，カラフト島はワタライカイとも云う。石巻より一ノ関28里，岩手より一ノ関18里，是古道なり」などと，1枚の和紙に略図と共に記している。

c）発行された国図を自分で縮少して利用している。また写図の国図も手に入れて，地名や日本の形状などの考証にしている。

d）国絵図については『江戸幕府撰国絵図の研究』（川村博忠，古今書院，1984）が参考になるが，省略する。

e）緯度記入—渋川春海（1636～1715）の測定値を用いていることは，赤水の草稿の原図に付けてある。それによると，奥州津軽42度，江戸36度，熊野34度，京都35度，高知33度，鹿児島31度，肥州長崎32度，対州36度，日本国経度東西12度，南北3度或は2度1度，大都40里程絶長補補短而均量之　長横百里也，と記した紙片がある。赤水は横線の緯度を渋川の測定値を利用して引画している。

f）経度については，渋川の「日本国経度東西12度」とあるだけで各地の度数がないから，赤水は，経度の経線は引画していない。経度測定の実証は，江戸後期の伊能忠敬（1745～1818）自身の測量により，京都を中度とし，東西に1度から表示するのが最初。

従って赤水日本図の縦線は，「経線」でない。赤水は日本略図に，ポルトラノ海図（図1参照）を描き，24本の方向線を引いている。これは日本各所の位置や方向を知るために利用した，と考えられる。よって縦線上に，12の方位盤があることからも，赤水日本図の縦線は経線でなく，方角線である。

中国流に解釈すると，緯線に直角に引いた縦線を，全体的にみると「方眼図法」とか，「方格図」とも考えられる。

赤水よりも29歳下の伊能忠敬の研究者は保柳睦美博士で，経度測定を中心に論述している。同博士の著書[12]に，長久保赤水の緯度やタテ線についても数か所にわたり論及し，赤水図のタテ線は経線でない，と明示している。

また中村拓博士も，その著『御朱印船航海図』にも，筆者と面談（上京して同博士宅）のときも，タテ線は経線でない，と記入し明言している。これは筆者も同意見である。従って赤水図を「経緯線記入」とか，「経緯線引画」と表示するのは，好ましくないと考えられる。「緯線と方向（方角）線記入」のほうが良い。

しかし，秋岡武次郎『日本古地図集成』（鹿島出版会，1971）と前著の『日本地図史』（河出書房）のうち，長久保赤水の日本図の種類に，経緯線投影の用語が表示されている。これにつき同博士の生前に筆者が上京して面談の時も話題になった。筆者が日本大学地理歴史科在学中の恩師（数理地理学）であるので，自由に話すことができた。同先生は，赤水図についての序文や凡例や，その他の資料を見て

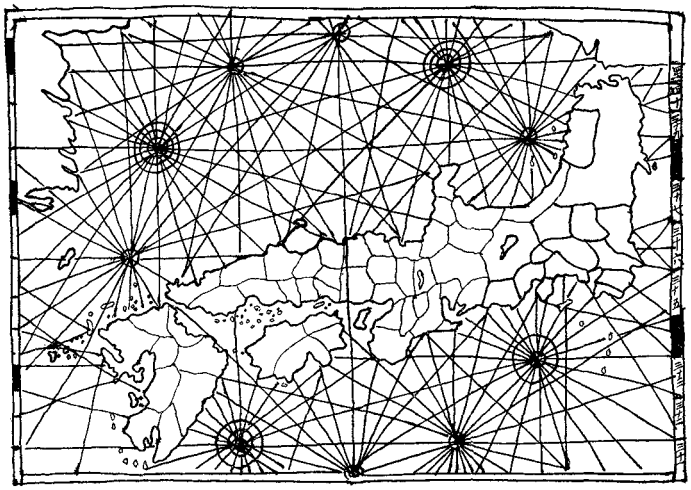


図１　長久保赤水模写のポルトラノ海図と日本略図(筆者が更に模写)
本図は68か国の国界はあるが国名はない。もう１つの赤水模写図は国名記入がある。朝鮮のギザギザは，図２と類似している。なおこの模写の原図は赤水が全部毛筆書き。

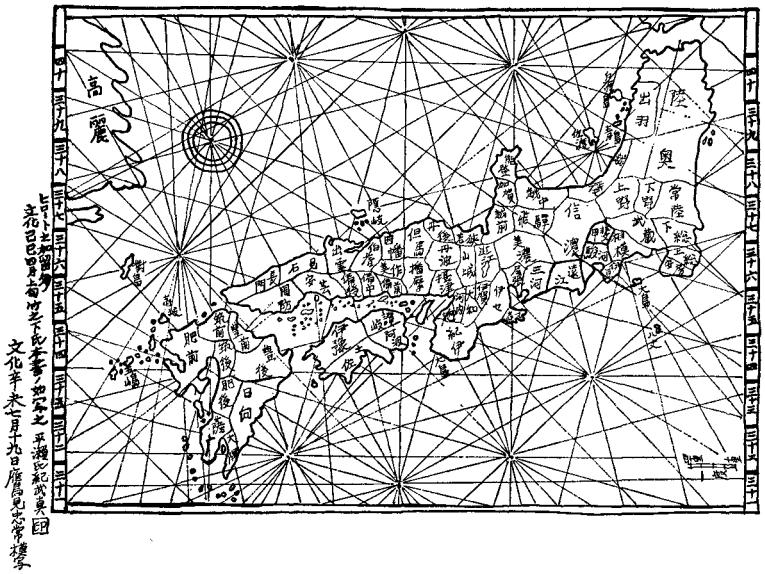


図２　ピロート之加呂多――鷹見泉石（1785～1858，下総国古河藩士，蘭学者）模写を更に筆者模写。
本図は768×550㎜，中村拓『御朱印船航海図』(1965刊)の図版12である。因みに赤水日本図刊行の安永８年(1779)は，泉石７歳の時になる。従って赤水のほうが早く模写したことになるが，原資料は不明と，中村博士は筆者に語っている。

いないから，長久保君がどのように表示するか，今後の研究にしなさいと言われたことがある。従って同先生の「経緯線投影」の表現や表示は，赤水図の横線と縦線の引画から解釈された，と筆者は理解し

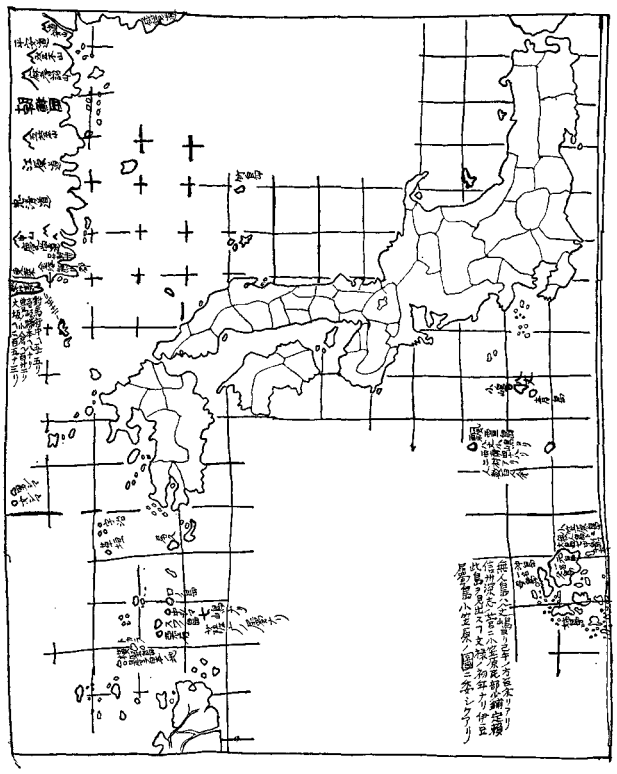


図３　橘守国模写の日本図――長久保赤水模写，更に筆者模写

85×102センチ，ヨコ線とタテ線は度数記入がない。朝鮮東岸はギザギザがあり，図１，図２と類似する。

ており，今後の研究課題でもあろう。

ｇ）森幸安の「日本地度図」（毛筆書き）には，日本68か国の国名が記され，余白に解説がある。図中に縦横の方眼の線が引画され，凡例に「東西の径度地之十二度に相互れり」とあり，径度とは緯度のことで，三十度から四十一度の緯度である。武州江戸は三十六度，東奥三十七，八度から四十度に至る。四国三十三度から三十四度，九州は三十一度から三十四度，長崎三十三度強など，本図は発行でなく宝暦四年（1754）の作図。縦線の説明はない。幸安は大坂の人で謹斎と号し，生涯，国図・絵図・地方図などを模写して，略図化し縮図した（国立公文書館で筆者は閲覧）。赤水が幸安の図を見たか，は考えられない。

ｈ）橘守国模写の日本図について，赤水は模写している（図３）。赤水は15枚の和紙を継ぎ合わせ，武州南方の八丈島・小笠原島・無人島を解説。また九州南方の島々・壱岐勝本へ80里・小倉へ120里，大坂へ253里と記す。先の幸安の図は，守国模写と類似。

守国は大坂の人，狩野派の絵師で，名所絵・唐土訓蒙図（1782年）など鳥かん図を発行（平凡社『大人名事典』３・４巻による）。

(4)赤水日本図の編集順序

ａ）「大日本輿地図初稿」の図名で作図したが，緯度記入はない。国別の有彩色で，全体的に美しく，地名・山川・名所の記入がある。

ｂ）「改製日本扶桑分里図」の図名は，発行図の原図になる。路程・海岸線の出入り・村々の地名・山川湖沼など訂正の胡粉が見られる。傍らに渋川春海の緯度値の付表がある。縮尺は道程10里を図上１寸にしている。今の縮尺の例により何十万分の一と速断できない。縮尺は道路（基幹，今の国道や県道）だけに用いられ，海岸の出入りや山などは縮尺を当てられない。作製は明和５年（1768）で赤水52歳の時で，水戸郷士　長玄珠子玉製とある。

この年号から判断すると，柴野栗山の序文は安永４年（1775）であり，完成は前年であるから，７年前に大部分はでき，その後修正していたことがわかる。

ｃ）改正日本輿地路程全図―縮尺はｂ）と同じ。この図名は折畳みの厚表紙の題箋である。よく表具師に依頼して表装すると，この題箋を捨てるから注意すること。地図上に記したのが「内題」で，「新刻日本輿地路程全図」というのは，柴野栗山の序文が「新刻日本輿地路程全図序」であるから。公共図

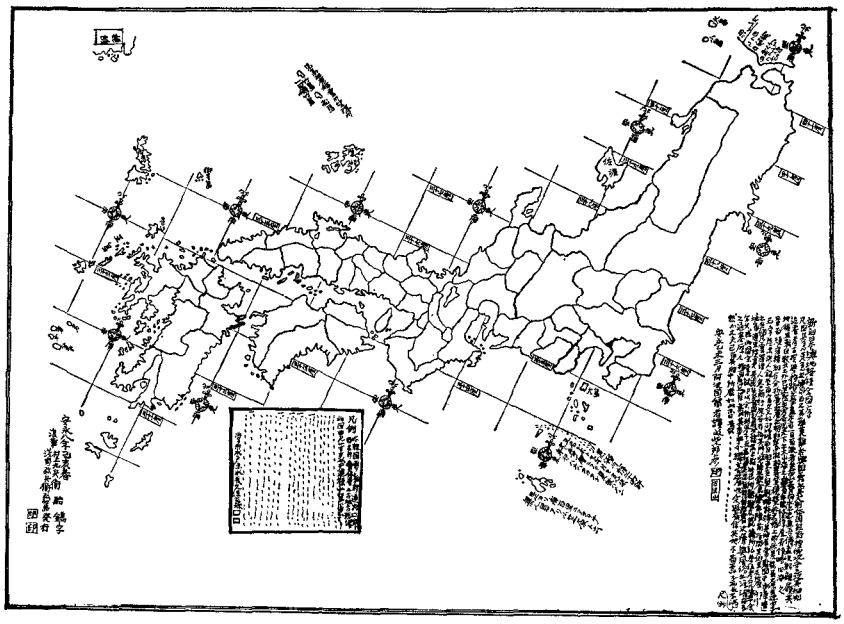
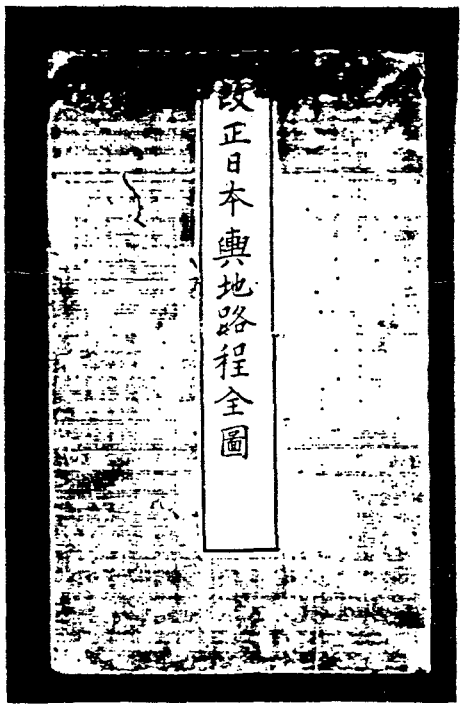


図4　改正日本輿地路程全図（題箋）

135×840センチ　8色刷，輪郭と一部の文字も筆者模写。

縮尺は凡例のように10里を1寸にしているが，場所により少しの差があると述べている。緯度は31度から41度まで引かれ，緯線に直角の縦線が引かれ正方形をなす。縦線は方向（方角）線で，12箇の方位盤記号がある。



この表紙は初版の題箋である。内題は「新刻日本輿地路程全図」。なお初版の上方左側には枠入りの「潮汐の解説」はない。

書館や大学付属図書館の索引カードに，内題が記入されているのは，題箋を廃棄又は紛失したからである。

初版は，安永己亥（つちのとい）春（1779）と浪華の発行所名がある。赤水が松岡七友の鈴木玄淳宛書簡に，安永九年に発行される，とあるのは「発売」の意味である。今も発行年月の記載よりも3か月，6か月おくれて発売されることもある。なお国別・山川・道路は有彩色。

再版は，寛政3年（1791）辛亥（かのとい）春正月　増補定本とあり，題箋も内題も初版と同じ。

3版は文化8年（1811），4版は天保4年（1833），5版は天保11年（1840），6版は弘化3年（1846），7版は明治4年（1871）と約1世紀間，赤水図として名声を博した。

赤水生存中は2回発行され，没後は5回である。題箋の名称が後に『増訂大日本国郡輿地路程全図』（嘉永5年＝1852）とあるのは．水戸長赤水原図

江戸 鈴木驥園 贈訂のように別人の増補による。なお「大日本輿地路程全図」とあるのも，別人の増補で，やはり「赤水原図」と明示されている。

d）初版と再版以後の区別

この区別も混同して記される。初版は，再版以後に図の上方左側にある枠内の「東都榊原隠士考証」の潮汐の解説がない。従って区別できるし，古地図購入の時も初版は高価である。

凡例の始めに，千古一業の関防印がある。

凡例のうちの四番目は「土地ノ遠近ヲ正サン為ニ北極星ノ度数ヲ合ス。大概三十二度程隔ハ天ノ一度違フ。故ニ極星ノ高低ニ随ヒ南北ノ度数ヲ知リテ，東西ハ準知スヘシ。日輪一時ノ間三十度ヲ過ク。東海ヨリ西海マテ天道十度違フ。故ニ常奥ノ午ノ初刻ハ長崎辺ニテハ巳ノ下刻ナリ。海面ニ棋画ヲ設ク。土地ノ遠近方位モ是ニ依テ知ルベキ也」とある。一時（いっとき）は2時間で経度30度に相当し，時刻と経度の関係である。また，棋画（きかく）を引いて方位や遠近もわかる。

おわりに

本稿は紹介的な研究ノートであり，後日研究をさらに発展させた論説を公表したい，と考えている。筆者の一族である「長久保赤水」の研究をはじめたのは20数年前のことであり，資料収集・古地図展即売会・地図関係の発表会などに顔を出して，一応の見解が確立するに至った。

すでに公表した拙稿や共同執筆の基礎になったのは，県立水戸第三高校社会科教諭としての余暇を利用（赤水の「余力あれば文を学ぶ」の精神も活用）してのことである。

その間に県立図書館や県立歴史館や資料所持者を訪ね，また文部省科学研究費補助金（奨励研究B）を3回受けたり（地理，哲学倫理，国語国文学），県教育委員会からも研究費補助金を受けたことも，赤水研究の力になった。

なお前文が長くなったのは，赤水の人物や著作活動の一端も理解してもらいたい欲目からである。従って本文の論理が不十分になったことをおわび願いたい。またこの拙稿は，既発表と内容的には別な考え方や解説が多いことを付記する。

（茨城県高萩市歴史民俗資料館非常勤職員）

〔注および文献等〕

1）「赤水文草」（写本）の最初に，乞後母墓碑銘文
一年始九歳喪レ母，翌年継母佐藤氏（中略），妾称二未亡人一，以如二夫子在日一，継母時年二十八，其父母，哀レ母氏無二生子一而早寡レ也（中略），撫二不肖一望二成立一愛如二骨肉一，不肖少好二読書一，親族皆曰，汝不レ欲レ習二貨殖一以興レ家，乃更務レ学，寧当レ挙二博士一邪，母氏曰，凡人本業之外，不レ無レ或可二翫而楽一者レ，（中略），有二余力一則学レ文，不二亦可一乎，吾与レ児，親族箝レ口（下略），母氏曰，未亡人受レ託幹レ蠱，而減二其産一，何面目対二神牌一哉，於レ是乞二貸其父家一，以償レ之，乃得二遺田全一也，而後為二不肖一択レ婚，及レ授二管鑰新婦一，移二居北堂一，（下略），唯児孫是愛，無レ有レ離二膝下一也，郷里嘖嘖称二貞節一，遂達二于官一，郡令顧二弊廬一以賞レ之，宝暦辛未九月寝病没，年五十七，諱阿咸，浮図氏謚曰法圓院妙純，葬二于松塚山先塋之側一，嗚呼不肖，微二継母一，不レ易レ至二於今日一也，前不レ能レ為二臥氷之勤一，後空抱二風木之悲一（下略）とある。

2）「赤水文草」の与二立原蘭溪一によると，僕也農之子，蹇蹶自分，幸曽請二益南溪先生之門一，微学二文学一，雖レ然窮僻乏レ書，東西乞借読レ之，（中略），東都有二徂徠者一其徒亦多出レ書，声名籍二甚四方一（中略））購二其書一読レ之下二通暁一，則以二僕請二益南溪先生一，或来而叩レ之，僕也，一介村学究，不レ可二以不一レ応其求一，竊自念，彼亦学二孔子一者也，（中略），蓋徂徠之学，主レ文忌二理学一格物窮理，博文約礼実孔孟正宗也，雖レ然物必有二長短一，苟取二其長一則何書不レ可レ読哉，南溪先生嘗語レ僕曰，本朝不レ乏二其人一，羅山之博物，仁斉之経義，白石之詩律，徂徠之文章，其庶幾乎，蓋取一其長一也，（中略），凡徂徠経義経済之論，迂遠膠柱不レ応二時勢一，僕雖二浅劣一，意深悪レ之，嗚呼天生レ才不レ尽，仁斎雖二能専一語孟一，至二於蔑一如大学孝経一，亦是異学之嚆矢也，（中略），況農家

鞅掌惟日不レ足，豈遑レ学二古文辞一哉，身遠在二田間一，不レ得二屢倚二玉於諸君子一（下略）。〔筆者注，漢学について詩友の立原蘭溪に書簡を出した文であり，文中の南溪先生は赤水の師・名越南溪の事〕

3）「赤水文草」に，（前略），先生其長子也，附二家資其弟一，出二寓下手綱邑一以レ医為レ業，志在二隠逸一，能通二和漢之学一，詩文俳諧莫レ不レ至二其妙一，常奥之間，志二于学一者，皆来請レ益，名声藉甚，先生之作詩，刻一意声律一，其所レ著和漢年代歌，唐詩平仄考，皆為二有識一（中略），無レ子先生，嘗愛二門人渡辺文質厚一，以二室姪女一，妻レ之，視猶レ子（下略）とある。

4）「赤水文草」—「和漢歴代歌題言」—吾友，松江鱸翁者，常北逸民也，性好レ詩，刻二意声律一，嘗作二和漢歴代歌一，（中略）学童小生，臨池之範，手習口述，一挙両益，可レ不レ伝哉，翁名玄淳，字子朴，松江其号也とある。

5）「赤水文草」—「祭二故柴田子敬一文」—明和三年丙戌四月十九日，友人長玄珠焼レ香敬祭二柴田君之霊一（中略），為レ人温良，治レ家勤倹，行有二余力一則読レ書作レ文，（中略），三十年誼如二兄弟一，初君不二以レ我為二不肖一，乃勧二我学一，我家無レ書，君仮レ我読，我無レ貨君借レ我弁，（下略），とある。

6）「赤水文草」—故法印三僧祇龍華院旭峰君塔銘—（前略），安永九年庚子臘月廿八日患レ痺，年六十八没（中略）嗣某請二銘于余一，余嘗与レ君結レ交称二常北七友一，歳月已逝，存者只三人，余亦喪レ君，可レ不レ傷哉，（下略），とある。

7）「赤水文草」—故青嶂大塚居士墓碑銘—居士諱一成，称二玄説一，号二青嶂一，姓大塚氏，出レ自二常州手綱城主掃部助一，（中略），遊二江都一後為レ医，（中略），医業稍盛有二余力一則読レ書賦レ詩，此時郷党好学者七人達二于　公聴レ，有二賜金之褒一，謂二之松岡七友一，居士其一也，為レ人尚レ倹節レ用，五十年如二一日一，有二一男一女一，男襲二本業一，女婿二長久保氏之子一，別立二一家一生二二孫一，愛二之膝下一習レ字教レ読レ書，優游以楽，不レ知二老之将一レ至，天明五年之秋，以二老病一晏然而没，年六十九，（中略），勤倹興レ家，孝順養レ親，余力学レ文，誠有二恒産一，徳亦有レ隣（下略），とある。

8）簡単な初歩的星座早見盤が付き（紙こよりで結び回転できる），解説をしている。末尾に，常州水戸　長玄珠子玉囿安永三年歳次甲午冬11月発行，浪華　細屋茂兵衛　藤屋徳兵衛とある。

9）最初に，司馬温公曰。四民之中。惟農最苦。寒耕熱耘。霑体塗レ足。戴レ日而作。戴レ星而息。而又水旱霜雹蝗蜮間為二之災一。幸而収成。公私之債。交争互奪。穀未レ離レ場。已非二已有一。所レ食者。糠粃而不レ足。然而以二世服二田畝一不レ知二捨レ此有二可レ生之路一。（中略）按古之農民。年貢上納。十分之一或廿分之一御座候。上納甚ダ軽少ニ候得共。諸役軍役を勤る間。兵士同様にて。今之民トハ違ヒ申候。是ヲ士農不レ分時ト申候。今日本の御年貢納メ之法。足利家之比より。夏は麦。秋ハ稲之上納ニ定リ候間。籾ニ而納メ麦ハ代金ニ而納リ（下略）とある。

10）「往復書案」（江戸と水戸史館の大日本史編修の事務上の公文書）にも，京坂や江戸の学者や文人とも一時は絶交し，世俗を離れて編修に力を注いだことが記されている（この文書は茨城県立歴史館蔵書の写本）。

11）赤水の長男藤八郎（敬忠）への書簡には，「昼夜地理志の編修の考に他事をば忘却し絶交いたし候（下略）」と書き送っている。

12）『伊能忠敬の科学的業績—日本地図作製の近代化への道—』（古今書院，1974）。同書の書評は，地図14—1，1976，「地図ニュース」P.20～21に筆者が紹介。

更に同書のうち赤水図については，「忠敬の経度記入は赤水図でなく伊能図が最初。投影法は西洋流でなく，東洋流の北極出地（緯度）と方格図の考え方から経線を描いたのは，中国の禹貢経天合地図や赤水図の思想と同様である。中国・日本の理想的地図の表現法は，一定距離ごとの縦線の直線による方眼式で，方格図である。赤水図は縦線には度数記入がなく，方眼は縦横同大の方眼であり，縦線を経線と考えられないから，禹貢図同様に方格図というべきであろう。」と，広瀬博士は見識を述べている。このように保柳博士の赤水図に対する所見（文例は多いので省略）や，広瀬博士の赤水図への卓見は，経緯線記入とか，経緯線引画（明治からの西洋流の地図投影法）の用語を表示するときに，参考にする必要がある。